



広島芸術学会「芸術展示」《制作と思考》第8回展

ホット・ジャパン—^{いき}粋と^{やぼ}野暮—（報告）

会期：2012年（平成24年）3月20日（火）～25日（日）

会場：広島県立美術館県民ギャラリー 第1～3室

会員から作品を募集する芸術展示《制作と思考》が第8回展を迎えた。今回展には28名の応募があった。応募者数が40～50名だった過去7回の実績からすると大幅な減少となった。数字がすべてではないにせよ、その原因を分析することは、この事業を続けていくうえで避けて通れない。

平成8年（1996年）に始まった本展がビエンナーレ方式を採りながら開催して、まもなく10回展を迎える。出品数減少の原因としては常套的な見方だが、初期の熱気が冷めてマンネリ化してきたことがまず挙げられるだろう。

もう一つ。今回展のテーマは「ホット・ジャパン—粋と野暮—」だった。過去7回のテーマは、比較的平易、普遍的なテーマで理解しやすい内容だったのだが、今回のそれはやや抽象的で、出品者にとってはつかみ所がなく、造形化しにくいテーマだったのかも知れない。創り手がこのテーマをよく吟味、消化し、作品として具体化するに

は平素からの「思考」が欠かせない。この点でやや無理があったような気がする。企図した企図側と創作する作者側との間に「テーマに対する理解」という点で、乖離、あるいはずれ違いがあったと見るべきだろう。

今回展のテーマの一部「ホット」は「クール」の対極にある語だ。「ホット」「クール」ともに字義は一樣でなくさまざまな解釈ができる。この点をもっと掘り下げ追求してほしかった。

また、今回展のテーマからは古典的な名著、九鬼周造《「いき」の構造》が想起されるが、この理論面での基本的な文献を理解、敷衍しつつ制作を試みた作品がほとんど見られなかったのは残念だった。

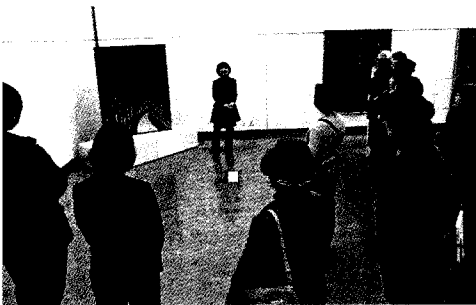
その中で船田奇岑《羽織の裏》はテーマに沿った作品で、性と粋とを正面からとらえていて注目された。また、江戸の伝統を引く三味線の世界を展示室に持ち込んで毎日午後、実演や指導に当たられた島田榮子（杵屋勝都栄）さんの実演・指導も、これまでにない「展示」として異彩を放っていた。年齢80歳を超えてなお衰えることのない伝統芸への情熱、かくしゃくたるその姿勢にはいたく感じ入った。

最後に、このたびの展示にご協力いただいた諸氏に心から感謝申し上げる次第である。

* * *

会期中の総入場者数は6日間で751人（1日平均125人）だった。これは前回展（テーマ：けはひ、1,372人）に比べると、45パーセントの減少だった。

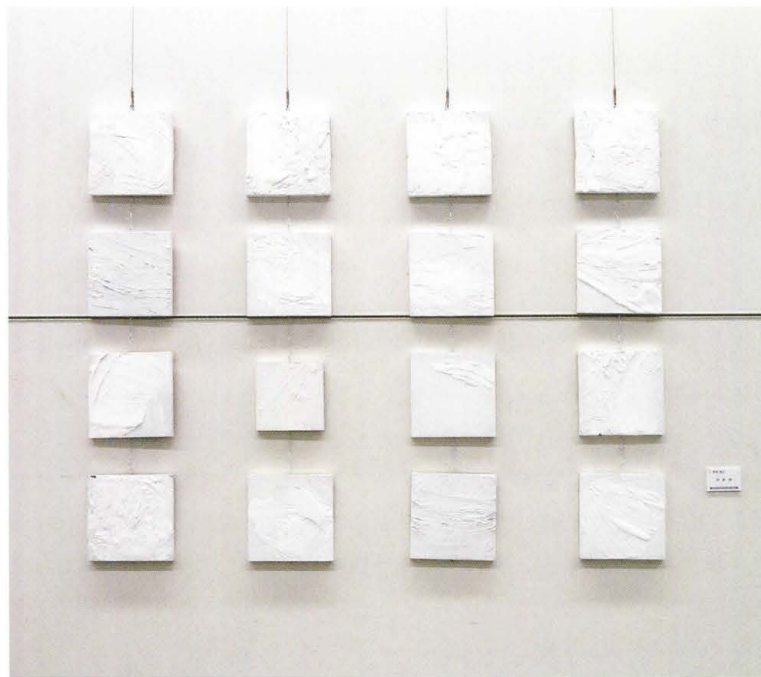
（実行委員長・倉橋清方）



「作者、自作の裏側を語る」 約30人が作者の説明に熱心に聞き入った。写真は自作について語る石下早苗さん（3月24日午後、広島県立美術館・県民ギャラリーで）

「ツナグ」

有田 悦子



「又違った表情を」

井川 雅子



「春遠からじ」

石下 早苗



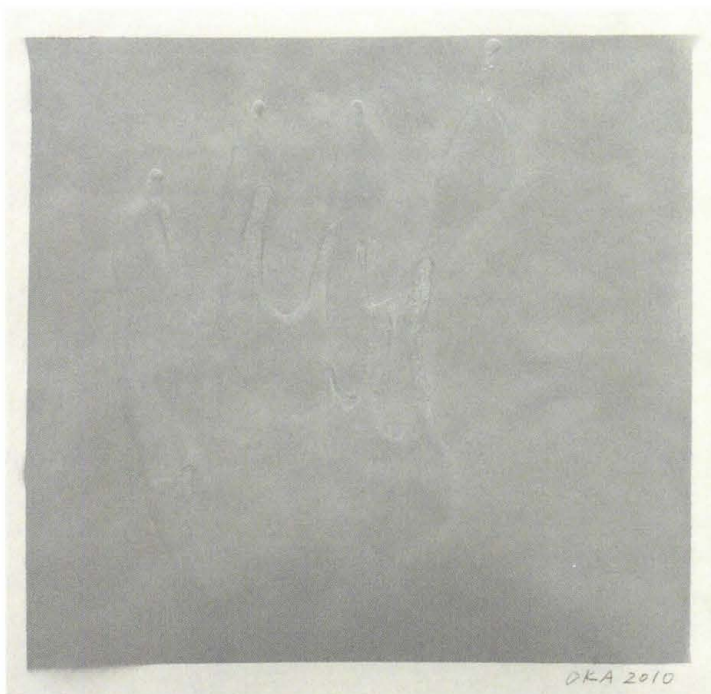
「MY PARTS」

大成 大輔



「OBSERVATION, flow」

岡 孝博



「歩く」

岡田 真理子



「モンスター I」

嘉屋重 順子



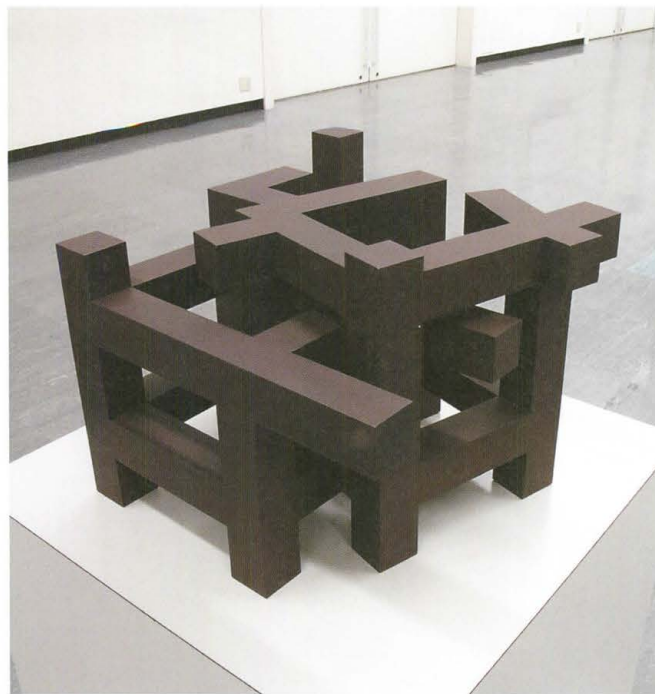
「我が逃走」

嘉屋 達也



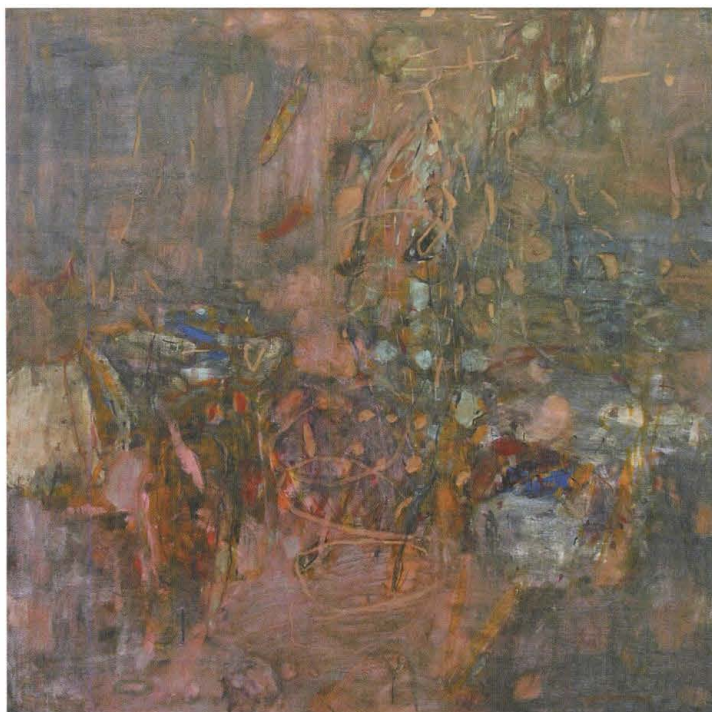
「獄舎と神殿」

木本 一之



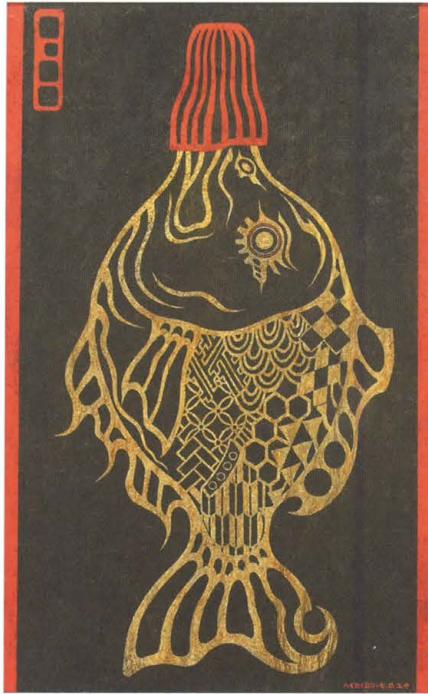
「EARTH」

越川 道江



「しょうゆ」

才田 博之



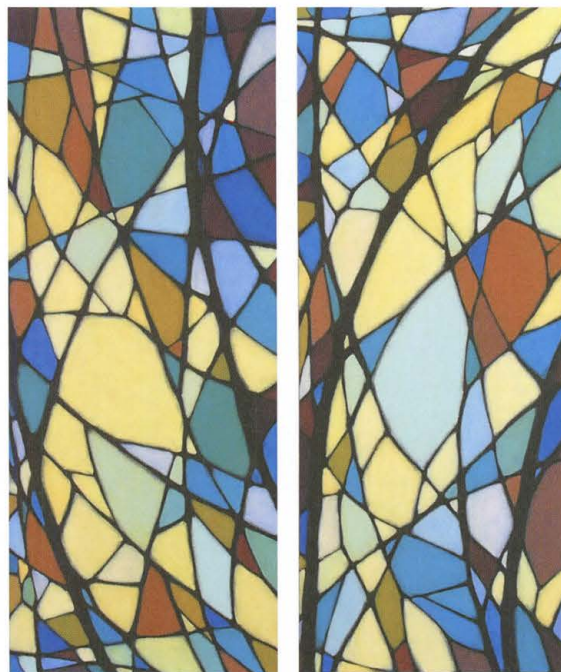
「へぼ」

椎木 剛



「Gothic」

渋谷 清



「江戸芸能を三味線で あなたも「さくら」が弾けますよ」(奏法を指導する島田さん=左)

島田 榮子(杵屋勝都栄)



「明日へ、明日の明日」

洲濱 勝子



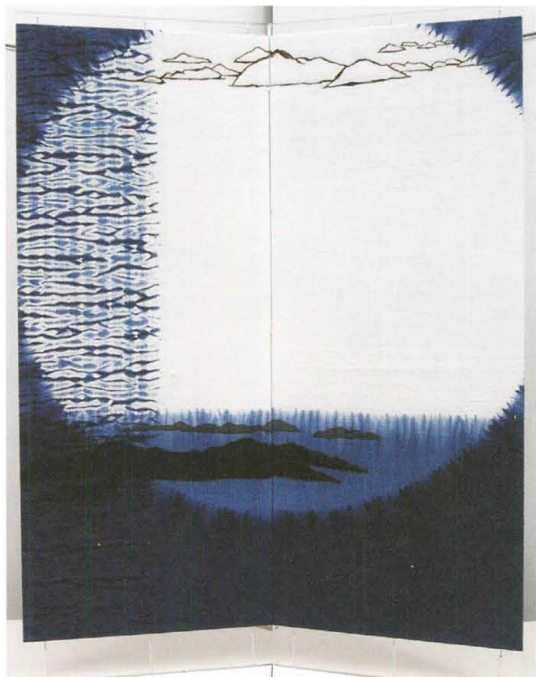
「予感」

田川 久美子



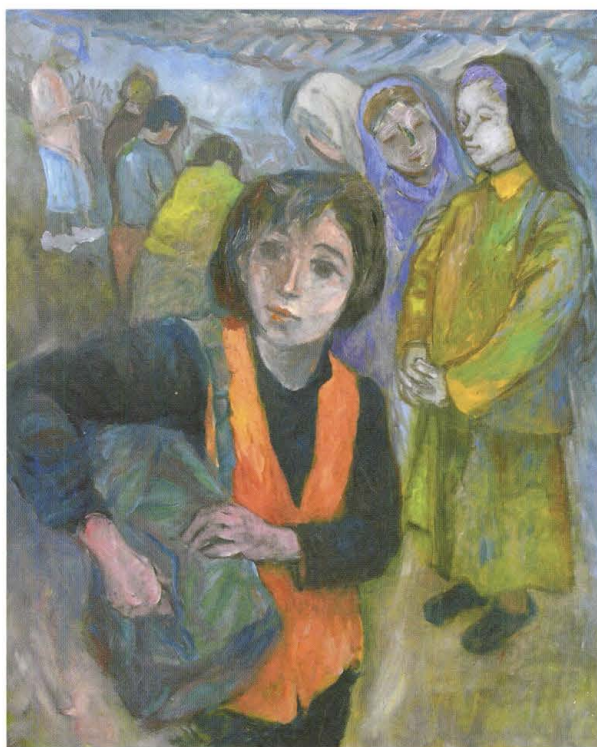
「瀬戸内」

竹村 信子



「記念日」

谷口 みち子



「樹高千丈 落葉 帰根」

千田 禅



「いつかいち1丁目」

徳田 ユキコ



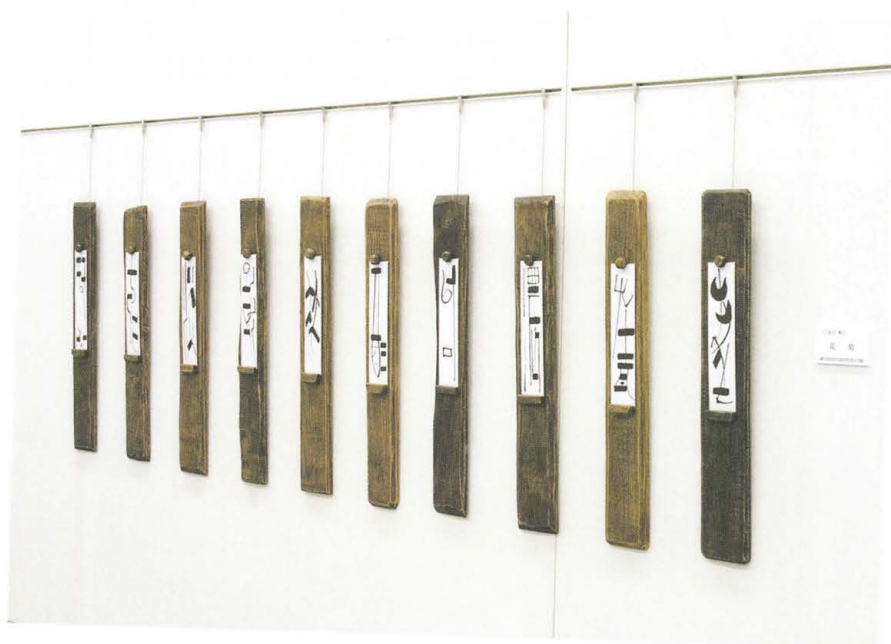
「カレサンスイ」

鳥谷部 圭子



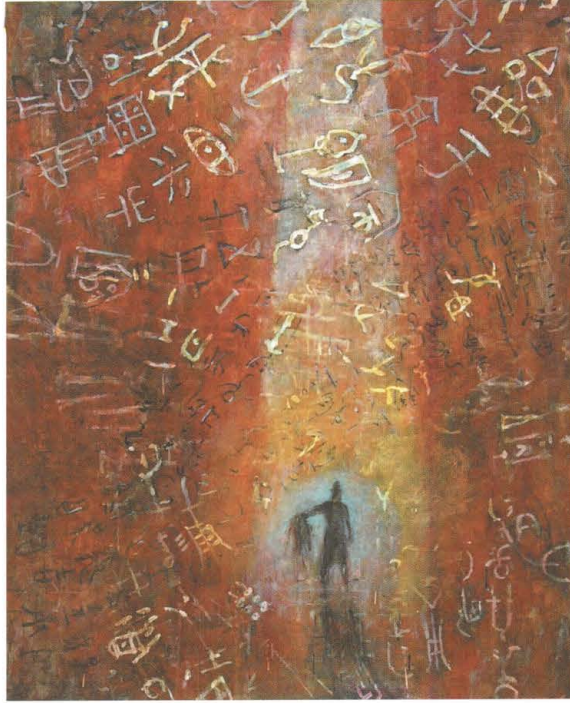
「花情」

夏目 暢子



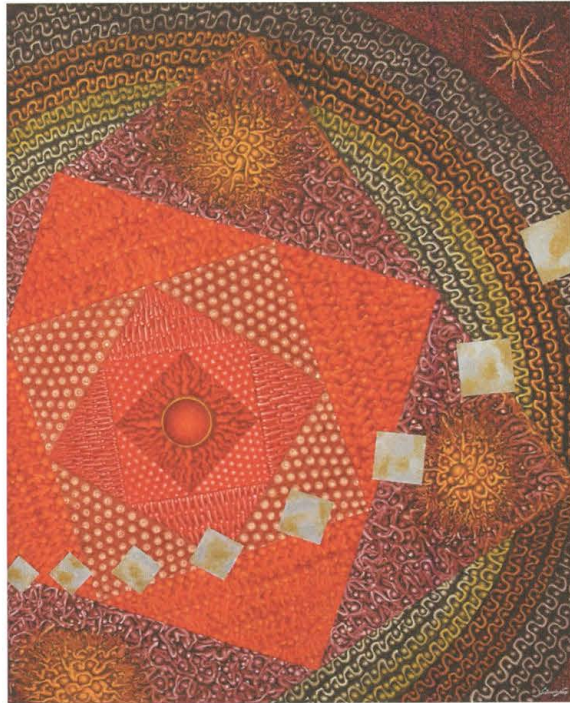
「道を行く」

新林 道子



「生(き)」

根木 達展



「3・11を」

福島 俊を



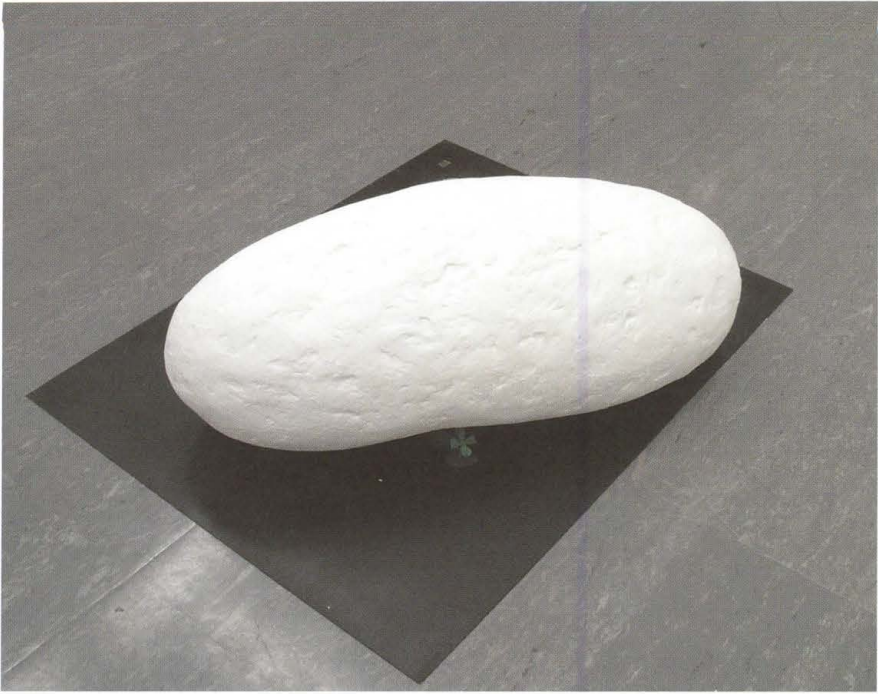
「羽織の裏」

船田 奇岑



「人知れず」

三浦 実一



「ブツタイ モシカシテ カジツ」

薮野 圭一



(左側から)

(右側から)